



Title	記号と同一性
Author(s)	中川, 勝昭; NAKAGAWA, Katsuaki
Citation	独語独文学科研究年報, 19, 49-62
Issue Date	1993-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25864
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P49-62.pdf



記号と同一性

中川勝昭

0. 序

未来の歴史家たちが20世紀の精神科学について回顧的に語る時には、「記号」という語が一つのキー・ワードとなることは、この世紀が終了するのを見届けつつある我々自身にとっても、疑う余地はないように思われる。「記号学」という名称が発案された時代には、「記号」とは思考を表現するための単なる補助手段に過ぎず、記号学は論理学に依存していた。というよりむしろ、記号学とは論理学の別名でしかなかった<1>。しかし、記号に関する科学は近代言語学の誕生と共に再生し、今世紀に入ってからは、それが当初懐胎されていた論理学という殻を脱ぎ捨てて、人間間の、広い意味でのコミュニケーションに関わるすべての事柄に、その適用領域を拡げるに到ったのは周知のことである。それは、文学や芸術、更には社会的な諸事象にまで及んでいる。それが実り豊かな成果をもたらしたかどうかは別として、いわゆる精神科学の内部において未だに「記号」の洗礼を受けていない分野はないと言っても過言ではないだろう。今や記号学は一つの学科として独立を果たしただけではなく、自らの下に、研究対象に応じた下位の諸分野すら従えている<2>。その意味で、記号学は確かに20世紀において発展を遂げたと言うことができよう。しかし、その一方で、記号学という建造物全体を支える基盤である「記号」という概念そのものは、壮麗になった建物の外観とは裏腹に旧態依然たるものだ。

「記号」とは、日常的な用語法では、自分以外の何かを指示する顕在的・可感的な対象である記号表現のみを意味するが、記号学においては一般に、記号表現と、それによって指し示される記号内容の連合関係全体のことを言う。「記号」をこのように捉える場合、連合関係を取り結ぶのは、必然的に常に「同じ」記号表現と「同じ」記号内容でなければならない。もし、記号表現にしる、記号内容にしる、自らの連合的相関者を自由に別なものと取り替えてしまうのだとしたら、それはもはや記号としては機能し得ないだろう。連合関係とは、恣意的な記号のように共同体内で通用している契約であれ、自然的指標のように既知のものとなった自然法則であれ、一定の恒常性を持つものでなければならない。

こうした記号概念を受け入れる者は、記号作用に関する一つの限定された理解を予め抱いている。

その理解というのは、記号作用、すなわち記号が記号として機能することは、記号表現が受信者によって「同じもの」として再認されることで初めて可能になるという先入見である。例えば、「いす（椅子）」という言語記号は、その表現面が「いぬ」でも「りす」でもなく、ほかならぬ「いす」として受信者に同定されるのでなければ機能することができない。「いす」という音声は、それを発する個人によって、また同じ個人であっても発する度ごとに、物理的には全く同一というわけではない。その都度不可避的に幾分かは異なっている。それにも関わらず、常に同じ「いす」として受容されることが、この場合記号作用が成立する必要条件である。もしそれが「いす」以外の何かとして聞き取られるとすれば、（「いぬ」や「りす」等のような）他の記号として機能してしまうか、あるいは全くの無意味——「いぶ」・「びす」等、更には分節音として聞き取られない場合も含まれる——となってしまうだろう。従来の記号観は、それがどのような立場のものであれ、このように記号作用における記号表現の同定を前提とするものである。そして、実は、記号作用のこうした限定された理解に基づいて、その記号概念を作り上げているのである。

ところで、記号というものを上記のように理解することは、我々自身の常識に照らしても、何の不都合もないように思われるばかりか、至極当然の事態を確認しているだけという印象すら抱かせる。しかし、果たしてこうした記号理解は、我々の事実に経験を経験を網羅的に説明するものだろうか。記号表現の同一性を失ってしまえば、本当に記号はそれ自身であることを止めてしまうのだろうか。本稿において問題にしようと思うのは、正にこうした事柄である。つまり、記号が機能する上で、記号表現の同一性は、どの程度、或いはそもそも、構成的であるかを明らかにし、そして、それによって従来の記号概念の有効性の範囲を見定めることである。

そこでまず、これまでの記号観を振り返って、批判的に検討することから始めようと思う。本稿の枠内では、もちろん歴史上の全ての記号観を通覧することは不可能であるし、また、それは必要でもない。というのは、記号表現の同一性を問題にする場合、その同一性をどこに定位させるかによって、従来の記号観は以下の二つに大別されるが、それぞれの代表的な理論家を扱えば、本稿の目的を達するには十分と考えられるからである。記号表現を物理的・可感的な対象そのものと見做し、その同一性が客観的に実在すると考える立場を実在論的記号観、記号表現はある意味で物理的な対象に基づくものではあるにしても、その同一性は意識に生起する現象の同一性であるとする立場を現象主義的記号観と名付けることにしよう。

1. 実在論的記号観

我々は、日常的・実践的には、見える通り・聞こえる通りに外部世界が存在しているという我々の確信を取り立てて疑うようなことはしないが、ここで筆者が実在論的記号観と呼ぶものも、そうした

いわゆる素朴实在論的な態度の延長線上にあると言ってよい。この立場に従えば、我々に記号表現として与えられている対象は、我々、つまり現実的・可能的なあらゆる主観から独立して、自体的に存在していることになる。したがって、例えば、ある音声が「いす」として聞き取られるのは、発せられた音声にそもそも「いす」と聞き取られるような音響的な特性が備わっているからだとされる。確かに「いす」という記号表現は、物理的に厳密に見れば、発音される度に異なるものである。しかし、それらのどの音声も「いす」と聞こえるからには、個々の場合で多少の変異はあったとしても、「いす」と聞こえるような共通な音響的特性を備えていると考えるのである。それゆえ、この場合には、「いす」という記号表現の同一性は、発信者の意図にも受信者の解釈にも依存しない客観的な物理的同一性として措定される。

ソシュール以前の伝統的な記号観の根底にあるのは、無批判に受け入れられた、こうした素朴实在論的な発想である。しかし、ソシュール以前／以後という区分も実際には便直上のものでしかない。というのは、实在論的記号観は、我々の日常的な感覚と合致しているものだけに、ソシュールより後の時代に位置する記号学者たちでさえ、こうした発想から手を切ることができずにいるからである。今世紀における記号学の発展の、最大の功労者の一人と見做されているヤーコブソンの場合も例外ではない。彼にとっては、記号学の発展の歴史とは、専ら諸記号の分類体系の精密化と対象領域の拡大化のことであって³、伝統的な記号概念の改変が発展の一段階を形成する可能性などないかのようだ。だから、自らの思想の多くの部分をソシュールに負っているはずの彼が、彼一流の銜学趣味に従って、彼の先達の記号概念をストア学派やスコラ哲学の伝統の単なる復興と捉えるのは⁴当然の成り行きとも言えるが、その際、彼はソシュールの独自性を十分に評価できてはいない。

「昔の記号の定義 —— "aliquid stat pro aliquo 或るものが或るものの代わりに立つ" —— が、今なお有効で生産的なものとして復活され提唱された。(中略)すべての言語記号は二部分から成り、二つの側面 —— 知覚し得る相と了解し得る相、換言すれば signans 能記体(ソシュールの能記 signifiant) と signatum 所記体(所記 signifié) —— を含む。」⁵

伝統に則って、記号の表現面を「知覚し得る相」(可感的側面)と名付ける彼の主張の背後には、記号表現の物理的同一性に対する素朴な信頼が透けて見えている。

しかし、彼の記号観を最も端的に「实在論的」と呼ばせることを許すのは、彼が音声言語の最小単位について考察をめぐらす瞬間である。ヤーコブソンの研究活動のさなかに、「言連鎖を音素に一貫して分割することが困難であるばかりか、不可能ですらあることは、運動ならびに音響の両レベルでの実験的研究によってすでに何度も確認されてきた」⁶。それゆえ、彼も個々の音素に対応する音響的な同一性の存在を主張したりはしない。しかし、彼によれば、記号表現の物理的同一性の探索に

おける困難さも、「(...)我々が音素のレベルを離れて、言連鎖を弁別素性の継起にまで分割すれば、たちどころに消滅する」〈7〉のである。実際、彼は、彼にとっての言語の最小単位である弁別素性——音素とは、この弁別素性が幾つか集まって一つの束を成したものである——には、物理的な対応物が存在するという確信を決して失うことはなかった。その意味で、より洗練された形態をとってはいるものの、彼においてもまた実在論的記号観が生き続けていると言うことができる。

言語音声という記号表現がそれを構成する小部分に分解し得るとする彼の信念は、知覚される形態は要素的知覚の集合から成り立っており、それぞれの要素的知覚には一対一に対応する物理的刺激が恒常的に見出し得るとする、いわゆる「恒常性仮説」〈8〉の、音声学における焼き直しに過ぎない。「恒常性仮説」自体は、統一的全体としての形態がその諸部分の知覚に対して独立的・先行的であることを示したゲシュタルト心理学によって否定されてしまっている。全体としての記号表現の認識は、それを構成すると見做される諸要素の総和に還元することはできないし、ましてやそれらを外部の刺激と対応付けることなどできないのである。部分の認識は、全体の認識にとって常に不可欠というわけではないし、部分が取り出され得るとしても、それはむしろ事後的・抽象的なものでしかない。音素であれ、弁別素性であれ、記号表現の想定上の構成要素に対応する聴覚的刺激を求めようとする試みが無意味であることは、第3節において明らかになるはずである。

2. 物理的同一性から現象の同一性へ

記号学の歴史におけるソシュールの独自性とは、記号を物理的・内世界的な存在ではなく、意識に内在する現象として定位し直したところにある。記号表現は、その感性的な可変性にも関わらず、それを受容する主観にとっては同一のものであり得る。「いす」という語は、それが物理的な音声である限り、必然的に様々な変異を被るとしても、受信者によって常に「いす」として聞き取られている。したがって、確かに「いす」という語はある同一性を持っていることになるが、それは音響的に規定されるものではなく、その音声を聞く主観の内部でしか保証されないものだ。ソシュールは、この点に注目したのである。

「言語記号によって結び付けられるのは、物と名前ではなく、概念と聴覚映像 (image acoustique) である。後者は、純粹に物理的である質料的な音ではなく、そうした音の心的刻印であり、我々の感覚が行う証言によって与えられる音の表象 (représentation) である。」〈9〉

ここでは、言語記号は世界内に存在する物体と現実の物理的な音声との組み合わせであることを止めて、主観の内部へと転移させられている。一方の「聴覚映像」は音響的な実体ではなく、それに対応

する内面的な表象である。聴取される物理的な音声は変異を被るとしても、この表象だけは「同じもの」として留まる。もう一方の「概念」も、「聴覚映像」に劣らず物理的・質料的な性質を持たない。「椅子」という概念は、我々が経験的に出会うどんな現実の椅子とも一致しない。それは、様々に異なった現実の椅子に接して、それらをいずれも「椅子」として認識する際に我々に与えられる、それらの経験に共通な意味のことである。ソシュールは、言語に限らず記号一般に適合するように、概念と聴覚映像をそれぞれ所記 (signifié)・能記 (signifiant) と言い換えているが<10>、これらが外部の実体に根拠を置く伝統的な signatum/signans と単純な等価関係にないことは明らかだろう。

ソシュールの記号観においては、記号表現の同一性は、その物理的・生理的な要因については問われず、受信者の同定行為だけが同一性の唯一の有効な根拠となる。そこでは、主観にとって超越的な対象は扱われず、意識に直接的に与えられた現象だけを問題とする立場が取られているために、「現象主義的」記号観という名称を与えることができるのである。彼が、音声の純粋に音響的な研究である音声学を、言語学の補助的な学科としか見做さないことは<11>、正にこうした現象主義的な態度の現れと言える。

ところで、彼の「聴覚映像」という表現は、意識内部の重要な構造上の区別がなされていないために、ある種の誤解の危険を孕んでいる。例えば、我々は、「いす」という音声を表象する場合に、男性の声でそうすることもできるし、女性の声でそうすることもできる。しかし、そのいずれも同じく「いす」である。ということは、たとえそれが表象であったとしても、現実の音声同様なお何らかの実質的な内容に付きまわっているのである。それゆえ、聴覚映像の同一性は、ただ単に内面的であるということだけで保証されるわけではない。聴覚映像を「同じもの」と言うためには、表象作用を構成する、ある一つの契機が見極められていなければならない。

ソシュールの着想を発展的に継承することで現象主義的記号観を完成させるのは、イエルクスレウである。彼は、記号表現と記号内容のそれぞれに「形相 (Form)」と「実質 (Substanz)」という区別を設けることで<12>、上記の問題を解決している。「いす」という音声は、実質的に様々に異なっている一方、「いす」として認識される限りである同一性を備えている。この同一性を一つの契機として取り出し、形相と呼ぶのである。この場合には、内面的表象でも物理的音声でも、全く同じように扱うことができる。特定の個人の声で表象された「いす」という音声表現は、その表象の個性を形成する〔表現〕実質と、「いす」としての同一性を保証する〔表現〕形相とから成り立っている。同様に、ある個人が発した現実の「いす」という音声を知覚する場合でも、その音声の感性的・質的内容と、「いす」という現出の構造とは区別される。この後者が〔表現〕形相であるが、それは音声自身に備わる何らかの音響的な特性というわけではない。それは、「いす」という同定が成立して初めて与えられるもので、あくまでも意識における現象の契機である。

記号の内容面にも同様に、形相と実質の区別が適用される。特定の椅子の表象であれ、現実の具体

的な椅子であれ、「椅子」として現れる限りで「椅子」の〔内容〕形相を備えている。その一方で、表象された椅子も現実の椅子も、個別的な椅子としてそれぞれの特異性を持っている。これは〔内容〕実質と呼ばれる契機である。ソシュールは記号の内容面を概念と規定していたが、「椅子」という概念は、確かに内面的なものではあるにしても、単に特定の椅子の表象ではなく、それを構成する「椅子」の形相であることになる。このようにして取り出された内容形相と上記の表現形相が、ソシュールの所記と能記に対応すると考えることができる。しかし、イェルムスレウの場合には、形相という契機を明示化することで、ソシュールの用語が持っていた曖昧さが完全に除去されている。

ここに到って、記号とは表現形相と内容形相の連合関係ということになったが<13>、記号における形相と実質の区別に配慮していたのは、実際にはイェルムスレウだけではない。意識における現象の構造を解明するのに力を尽くしたフッサールもまた、同様の区別に到達している。

「(...)我々が何らかの表現(例えば、『平方剰余』)の意味を問う場合、表現ということで考えているのは、今ここで発せられた音声、つまり、その場限りで、同一のものとしては決して繰り返されることのない音響ではもちろんない。我々はこの表現を、その種において(in specie)考えているのである。表現としての『平方剰余』は、誰がそれを発しようとも、全く同じものである。」<14>

我々はここに、上でのソシュールの引用が、異なる表現で繰り返されているのを聞くことができる。イェルムスレウの形相と実質の区別は、『論理学研究』でのフッサール流に言えば、内面的な音声の場合には、音声の想像と想像された音声の区別であり、物理的な音声の場合には、音声の知覚と知覚された音声の区別ということになるだろう。いずれの場合にも、形相に当たる前者は志向的な(intentional)所与、実質に当たる後者は実的な(reel)所与ということになる。

ところで、我々の言う現象主義的記号観においては、記号表現の同一性とは、物理的に根拠づけられたものではなく、単に意識に現出する限りでの同一性であるが、その同一性が相変わらず記号作用の前提となっている事情には変わりがない。だから、例えばフッサールは次のように述べることを止めようとはしない。

「表現する記号が持つ特性である意味作用(das Bedeuten)は、正にその記号を前提としているのであり、意味作用はその記号の意味作用として現れる。あるいは純粹現象学的に言えば、意味作用は、かくかくしかじかに性格付けられた作用特性であり、それは一つの直観的表象の作用を不可欠の土台として前提する。」<15>

ここでも、記号作用が成立するためには、表現形相が直観されることが前提となっている。

従来の記号観は、それがどんなものであれ、上で見てきたように記号表現が同定されることが記号作用にとっての不可欠の条件であるとしてきた。しかし、それは果たして事実即したことなのだろうか。次の節では、最も代表的であり、他の諸々の記号の基礎にもなっている言語という記号、すなわち音声と文字をもっと詳細に検討することにしよう。

3. 文字と音声

発せられるや否や消え去ってしまう音声とは異なり、文字はその持続性のおかげで、繰り返しの確認にも堪え得るものだし、観察者の文化的な被拘束性とは関わりなく、誰にとっても同一のものとして、その姿を現しているような印象を与える。それゆえ、文字の同一性とは、音声に比べて、より客観的であるかのようだ。我々の周りには、印刷されたものであれ、電氣的に映し出されたものであれ、規格化され画一化された文字が溢れている。このことは、文字が使用される場合には、一つ一つの文字は常に単独で同一性を保っているものだという錯覚を強めることにもなる。だが、記号表現としての文字は、記号作用において本当に常にその同一性を維持しているだろうか。

この問いに対しては、身近な事象を注意深く観察するだけで、直ちに否定的な解答が得られるだろう。何か手で走り書きされた文字を取り出して眺めてみるがいい。欧文の場合であれば筆記体で書かれたものを思い浮かべればいい。こうした、形が崩れ、場合によっては連続して書かれている文字は、一つの語なり、あるいは一つの文として、つまり意味の一まとまりとしては、造作もなく理解できたとしても、個々の文字を単独で眺めた場合には判読に著しい困難が生じる筈である。ある一つの箇所を見た場合、他の文字と形態上区別がつかないというばかりでなく、そもそも何らかの文字であるのかどうかさえ分からないということもある。こうした場合には、もちろん記号表現の同一性が保たれているとは言えない。むしろ、全体の意味の理解が先行して、記号表現としての個々の文字は後になって初めて同定が可能になるのである。

確かに多くの場合、幾つか文字は、意味理解の手掛かりとして始めから単独で判読可能となっていなければならない。そうでなければ、全体の意味さえ分からないということになってしまうのだから。しかし、その場合でも、単独では同定できない文字が存在しているという事情には変わりはない。それに、最初はどの文字も同定できなかった、ある表記されているものの連続体が、それを取り囲む言語的・言語外的なコンテキストが明らかになることによって、意味の全体とともに一挙に文字の分節が与えられるという事態も、我々はしばしば経験する。記号表現としての文字の形態上の特徴は、記号作用が完遂される際の重要な手掛かりであることには間違いないが、しかし、それが全てというわけではない。

文字形象の本質については、ソシュールも有名な差異のテーゼに基づく考察を行っている。言語にとって音の質料の実質が重要ではないことを論じた後で、文字にも同じ事態を認め、ある文字の様々な感性的実現の物理的特性は、その記号的機能にとって第二次的なものでしかないことを指摘する。

「文字の価値は純粹に消極的・差異的である。それゆえ、同一人物が次のような様々な書体でtを書くことが可能である。(中略)唯一重要なことは、この記号が、その書体においてlやd等の記号と混同されないことである。」<16>

この引用箇所では、例として三つの手書きのtの文字が載せられているが、確かに彼の言うように、tと認識される形象は、経験的には無限のヴァリエーションをもって現れる。それは、物理的・数量的には規定することはできない。したがって、tという文字の本質に関する、いかなる積極的な定義も不可能で、そこには、他の文字と異なっているという消極的な規定性が辛うじて見出されるだけである。

しかし、ここで考察の対象になっているのは、実際には記号としての現実の使用を離れて、単独で形態そのものとして見られた場合の文字であって、文やテキストを構成しているような、実践的に使われている文字ではない。もし、そこで暗黙の内に定められている、観想の対象としての文字という考察範囲を踏み越してしまえば、彼の「消極的差異」のテーゼは雲散霧消してしまうことになる。

既に上で明らかにしたように、ある文字がtと認識されるのは意味からの限定による場合があるから、それが単独で見られたときにlやdと混同される可能性があったとしても構わないわけである。したがって、コンテキストという手掛かりが与えられていれば、tという文字形象の変異の幅には際限がなくなり、差異という消極的な規定性さえ不要になってしまう。ソシュールも恐らく、全体の中に連続体として入り込むことで個々の部分が形態的な自律性を失い、部分の同定が全体の意味の理解に依存してしまうという事態に気付いてはいただろう。ソシュールの持ち出した例が、uとnのように筆記体で書かれれば見分けが付かなくなるものではなく、意味からの限定がなくても比較的判読が容易なtであるということは、単なる偶然ではない。それは、「記号の価値は、消極的・差異的なものである」という自らの主張が通用する領域から逸脱しないための用心深さなのだろう。

さて、個々の記号表現が不完全な形態しか与えられていなくても、なお記号作用を行うことができるという事態が、文字という媒体のみに限られたものであるならば、単なる例外として、ことさら注意を払う必要もなかっただろう。ところが、こうした事態こそが一般的で、記号表現がその十全の形で現れることのほうがむしろ稀であるとしたら、従来の記号に関する理論は再考を迫られるのではないだろうか。我々が最も頻繁に使用する記号、つまり音声においても事情は文字と同じであるなら、それは記号概念にとって少なからぬ影響を持つのではないだろうか。これまでの音声認識に関する研

究によって、実際、我々が上で文字という記号において見出した事態が、音声の場合には、ごく普通の出来事なのだということが明らかにされている。

我々は常識的には、言語音声のことを「分節音」と呼ぶように、客観的に見て既に何らかの単位に分節されている音声をやりとりすることで、言語的なコミュニケーションを図っていると考えている。

「しかし、実際には音声は連続的に変化する信号であり、音声形やその分析で得られたパラメータ上に境界を示す明確な物理的特徴は存在しない。」^{<17>}つまり、分かりやすく言えば、連続音声とは筆記体で書かれた欧文のようなもので、どこである単位が終わり次の単位が始まるのか、更にはどこが単位の本体部分でどこが次への移行部分なのかということが、物理的な特徴からは客観的に決定できないということである。こうした現象は、発声の際の、いわゆる調音結合によって生じる。例えば音素を単位として見做した場合、実際に発せられる音声は、独立した離散的な音素の継起によって成り立っているのではない。調音行為がそれぞれの音素に対応した形で独立に行われるのではなく、前後の調音行為と重なり合うために、音素間の境界が曖昧になるばかりではなく、ある音素に備わっているべき音響的特徴が変形されたり、別な音素の位置に重なったりするのである。

実際の場面で生起する音声は、そのうえ、聞き手に対して常に協力的に発音されているとは限らないし、言語音以外の雑音が全くないような理想的な状況で聞き取られているわけでもない。その結果、音声を認識するということは、その物理的な特徴ばかりではなく、言語的・言語外的な様々なコンテキストに依存した解釈行為、言わば非常に複雑な「復号化」^{<18>}に成らざるを得ない。「ことばの認識は、音響的な手掛り、言語学的な手掛り、あるいは意味論的な手掛り、すなわちそのときの主題やそのとき話された単語の意味などに関する手掛りや、周囲の状況（話し手が誰であるかなど）からの手掛りなどが組み合わされてはじめて完成する。」^{<19>}我々が外国語の習得過程においてしばしば経験させられるように、言葉を正確に聞き取るとは、単にその音声の音響的な特徴に注意を集中させるということではなく、その言語に関わる様々な約束事・生活習慣・文化的な背景などに予め精通していることによって初めて可能になるのである。

音声の認識が、いかにコンテキストに依存しているかということは、例えば次の様な実験が示している。一群の被験者に対して、ある同一の音声を三つの異なる文の中に入れて聞かせてみる。すると被験者には、それぞれの文の意味に応じて、その同一の音声があるときは bit、あるときは bat、またあるときは bet と聞こえたということである^{<20>}。人間の情報処理の過程が一般にそうであるように、音声知覚においてもまた、受容された刺激を分析してその結果を受動的に積み重ねていく（ボトムアップ処理）一方で、解釈のための知識や概念を能動的に繰り出していく（トップダウン処理）という二つの認識過程が同時的・協調的に進行していく。しかも、「(...) トップダウン処理は、知識の力を借りてボトムアップ処理の不完全な部分を補うものではなく、知識による概念化を積極的に行い、ある特定の言語音声が存在するに違いないという期待を作り出す」^{<21>}のである。その結果、

物理的には異なる音声を同じものと、またはその反対に同じ音声を異なるものと認識したり、存在していない音声が聞こえているかのような印象をもったりすることがある。つまり、音声知覚というものは単に物理的な刺激の反映ではない。そこでは、もちろん記号表現の同一性の物理的対応物を恒常的に見出すことなどできない。そして、そればかりではなく、主観が知覚を構成する際に投入するカテゴリー、すなわち形相についても、表現形相が先行的であるとは限らず、意味が分かるからこそ、それに対応する表現形相が繰り出されるという事態も生じている。

文字と音声の認識過程を通して我々が出会った経験的現実、従来の記号概念の不備を決定的に浮かび上がらせる結果となった。記号作用とは、これまでの記号観が無批判に想定していたように、記号表現の同定を常に前提とし、それに基づいて記号内容の認識が行われるという一方通行的な過程ではない。それは、一連の表現全体の内部・外部のコンテキストと連動し、記号内容の有機的統一体としての意味志向全体へと向かう複合的・循環的な認識過程である。部分的には、記号表現の同定が先行する場合も確かにあるが、それが常に記号内容の理解の前提となっているわけではない。意味志向全体の理解があるからこそ、部分としての記号表現の同定が可能になる逆方向の過程も存在しているのである。

4. 「記号」とは何か？

前節において、常に記号表現の同定が先行するという考え方は一応否定された。しかし、ソシュールが「一枚の紙の裏表」という比喻によって強調しているように<22>、能記（表現形相）と所記（内容形相）とは、そもそも分離不可能なものではなかつたらうか。それゆえ、コンテキストに依存した理解の場合には、所記と能記が一体となって、同時に同定されると考えることができるのではないだろうか。その意味で、記号表現の同一性は、なるほど記号作用の前提ではないものの、記号内容が理解される時には常に随伴する現象として、少なくとも記号作用にとって構成的であるとは言えないだろうか。

ところが、記号の存在性格というものを考えるとき、そうした主張もまた退けられてしまうことになる。ある対象が記号として機能している場合、それは、それ自身として主題的に意識されているわけではない。記号表現としての表現形相が直観されているわけでもないし、もちろんその実質に注意が向けられているわけでもない。ハイデッガーが道具一般について使った言葉を借りるならば、この場合、記号の表現面はある種の「目立たなさ (Unauffälligkeit)」<23>の内にある。これは、我々がハンマーのような道具を使用する場合と同じことで、我々はハンマーを道具として使用している限り、その物理的形狀を問題にしたりはしない。ハンマー自身のことは、ある意味で忘れてしまっている。我々が注意を傾けているのは、むしろハンマーを使って成されるべき行為である。道具一般のこのよ

うな存在性格を、ハイデッガーは「手元性（用具性）(Zuhandenheit)」と呼んでいるが、これは、同じ道具でも対象化され主題的に見られた場合の「手前性（客体性）(Vorhandenheit)」と対立するものである<24>。記号作用を行う記号表現の存在性格とは、正にこの手元性ということだろう。

我々は、記号表現が客体的に把握される時、それが記号作用にとって障害にさえなることを様々な事例から知っている。ある人が話している際のその音声を、我々は意味上筋立った一連の談話として理解することができるが、もしその最中に個々の音声記号をその表現面において意識するなら、我々はたちまち話の脈絡を見失ってしまうことになるだろう。文字の場合でも同じことで、文字を習得したばかりの子供のように、テキストを構成する一つ一つの文字を記号表現として同定している間は、テキストの意味については何も理解できていない。テキストを理解するときには、一つ一つの記号表現は、それ自身としてはある意味で忘れられ、目立たない状態にあるのでなければならない。

現象主義的記号観においては、記号とは表現形相と内容形相の連合関係のことであった。しかし、記号のこうした手元性という性格を考慮するならば、記号とは内容形相という契機を伴って現れる表現実質ということになる。もちろんこの場合、表現実質は意識の志向対象ではないという意味で。それは、ある無規定的な物理的刺激を正に意味として認識することである。<いす>という音声を聞いて「椅子」と理解する瞬間には、我々はその音声を「いす」という表現形相において同定しているのではない。<いす>という音声の表現実質が我々の経験を構成してはいるが、経験の志向的な内容とは「椅子」という意味なのである。なるほど、我々は次の瞬間には随意にその音声を客体として把握することができる。しかし、その瞬間には、その音声は既に記号作用を止めてしまっているのである。

したがって、ある同一の物理的刺激としての記号表現に接するには、二つの態度があることになる。一方は、関与的・実践的態度、もう一方は非関与的・理論的態度である。前者の場合、受信者は意味を汲み取ることに専心し、最も理想的な場合には、記号の表現面には全く注意を払わない。言語記号の受容について言うなら、それはまさしく「言語忘却 (Sprachvergessenheit)」<25>の状態である。これは、我々が常に自覚的に記号を受容しているという幻想をもつ記号学者たちにとっては、受け入れ難い事態に違いない。従来の記号の理論には主意主義的な発想が付きまとっているが、それを捨て去らない限り、記号作用というものを十全に理解することはできないだろう。我々は確かに記号によって意味の経験を持つけれども、その意味の経験は与えられるのであって、我々が完全に主体的に構成しているわけではない。むしろ、記号表現と呼ばれる物理的刺激によって知らぬ間に触発されているに過ぎないのではないだろうか。いずれにせよ、この場合には、主体的／客体的、能動的／受動的といった区別はあまり役には立たないだろう。

もう一方の非関与的・理論的態度の場合には、記号表現は単なる対象として把握され、意味の理解は問題にされない。これは、その記号表現が発せられた状況に係留されておらず、それゆえ意味に関

心を持たない理論家の態度と言うことができる。しかし、実践の中に置かれている者でも、その状況から身を引き離すことで、いつでもこうした態度を取ることができる。

記号表現は、それに接する者のこうした二つの態度に応じて、二つの異なる相貌を見せる。それはまるで、向かい合わせの二つの横顔と杯とが同じ一つの曲線図形から互いに排他的に現れる、「ルビンの杯」という有名な錯視図形のようなものである。受信者は、記号表現を表現形相として受け取ることもできるし、内容形相として受け取ることもできる。しかし、それらは互いに排他的な関係にあるのであって、二つ同時に現れることはない。記号作用において内容形相が現れる時には、表現形相の方は現れない。記号表現が表現形相において同定されることは、記号作用の前提でもなければ、その一つの構成要素というでもないのである。表現形相と内容形相が表裏一体となった「記号」とは、このように本来は排他的にしか現れない二つの形相を、同時に現れ得るかのように扱うことで作り上げられている。

ところで、記号作用というものが、ある表現実質が内容形相という契機と共に現れることとするならば、結果としての記号内容の同一性だけは保証されていることになるだろう。しかし、実際にはこれも記号についての理想化された理解に過ぎないものだ。一連の表現全体（文・テキスト）の中では、個々の記号の内容面もその同一性を保っているわけではない。表現全体に対応する意味志向の全体とは、建築用石材を積み上げてできた建物のように、個々の記号内容の単なる算術的な総和ではない。個々の記号は、コンテキストによって転義的に用いられる場合もあるし、反語的表現の中では全く正反対の意味さえ持つであろう。しかも、そうした転義的な意味は、その記号の本来的な意味である内容形相を常に経由して理解されているわけではない。ここでも、全体の理解によって初めて部分の理解が可能になる場合があるということを思い出さねばならない。だとすれば、ある記号表現の連合的相関者と見做される記号内容とは、その記号が単独で見られた場合の理想化された意味ということになるだろう。従来の記号観においては、「記号」とは、「同じ」記号表現を前提とした「同じ」記号内容の想起のことであった。しかし、我々が文字と音声の検討を通して見たように、記号の受容過程とは、意味志向の全体を目指した複合的・循環的なものである。この過程は、単に「同じもの」の再認を積み重ねていって全体を構築するという図式では十分に説明できない。「記号」とは、それによって我々が名指している事態の忠実な反映とは言えない。それは、全体の受容過程の中から、一つ一つの記号表現と記号内容が理想化されて取り出された上、事後的に結び付けられたものに過ぎないのである。

注

- <1> 周知のように、最初に「記号学」という名称を使ったのは、ロックと言われている。「第三に、三番目の部門はセーメイオーティケー、すなわち記号論と呼べよう。記号の最も通常のもは言葉だから、ロギケー、即ち論理学と名づけるのも十分ふさわしい。その仕事は、物ごとを理解したり、物ごとの知識を他の人たちへ伝えたりするために、心が使う記号の本性を考察することである。」J. ロック：『人間知性論』，大槻春彦訳。In: 『世界の名著・32』，中央公論社（1980）1991，S.188.
- <2> 「記号学はその対象と方法によって、一般記号論と応用記号論に大別され、また記号使用者からみて、人類記号論、動物記号論に分れる。文学、音楽、建築などについては、主としてそれらの人間社会におけるコミュニケーション機能との関連で、それぞれ文学記号論、音楽記号論、建築記号論などがある。」『記号学小辞典』，脇阪豊・他編著，同学社 1992，S.34.
- <3> 例えば、次のような論文にそうした理解の仕方が見られる。Roman Jakobson: Ein Blick auf die Entwicklung der Semiotik [1975]. In: R.J.: Semiotik. Ausgewählte Texte 1919-1982, Frankfurt a.M. 1988, S.108-135.
- <4> 「(...) ストア学派やスコラ哲学の伝統において、またその復興者であるフェルディナン・ド・ソシュールの著述において (...)」R. ヤーコブソン：『一般言語学』，川本茂雄監修，みすず書房（1973）1985，S.91.
- <5> Ebd, S.136.
- <6> R. ヤーコブソン/L. ウォー：『言語音形論』，松本克己訳，岩波書店 1986，S.25.
- <7> Ebd, S.26.
- <8> M. メルロー＝ポンティ：『知覚の現象学1』，竹内芳郎・他訳，みすず書房（1967）1982，S.36.
- <9> Ferdinand de Saussure: Cours de linguistique générale. Edition critique préparée par Tullio de Mauro, Paris (1972) 1990, S.98.
- <10> Ebd, S.99.
- <11> Ebd, S.56.
- <12> Louis Hjelmslev: Prolegomena zu einer Sprachtheorie (übersetzt von R.Keller u.a.), München 1974, S.56ff.
- <13> 「しかし、『記号 (Zeichen)』という語は、我々が記号機能と呼んだ連帯関係によって確立される、内容形相と表現形相から成る統一体の名称として用いるほうが、より適切に思われる。」Hjelmslev, S.61.
- <14> Edmund Husserl: Logische Untersuchungen II/1, Tübingen 1980, S.42f.
- <15> Ebd, S.76.

- <16> Saussure, S.165.
- <17> 甘利俊一（監修）／中川聖一・鹿野清宏・東倉洋一（共著）：『音声・聴覚と神経回路網モデル』，オーム社 1990，S.138f.
- <18> Ebd, S.139.
- <19> P. B. デニッシュ／E. N. ピンソン：『話しことばの科学 — その物理学と生物学』，切替一郎・他監修，神山五郎・他訳，東京大学出版会（1966）1969，S.165.
- <20> デニッシュ／ピンソン，S.7.
- <21> 甘利，S.126f.
- <22> Saussure, S.157.
- <23> Martin Heidegger: Sein und Zeit, Tübingen 1967, S.75.
- <24> Ebd, S.69ff.
- <25> Hans-Georg Gadamer: Text und Interpretation. In: Ph. Forget (Hrsg.): Text und Interpretation, München 1984, S.37.

（大学院博士課程）